

# うきたむ

第6号

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

1995.10.12

(山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117 TEL 0238-52-2585)



縄文土器の野焼き —8月6日—

## 考古資料館の発展のために

本館運営協議会委員

菅井敬一郎

資料館では、ものの収集・整理・分類・展示・保管と収集品の研究が、基本的な最低限の仕事である。当然、報告書等、さらに専門的な詳細な成果も要求される。

本館は、常設展示、企画展示、収蔵品展をはじめ、各種の教育普及活動は、川崎館長を中心とした職員の熱意によって、極めて充実してきた。全国に誇れる質の高い活動の展開に対し、深く敬意を表したい。

この資料館は、観覧者が古代への夢と想像を巡らせ、郷土の自然や文化を愛する心を育てる場であり、想像力、思考力などの創造性を培う場でもある。

昨年度は、二年目のためか、入館者が減少して気にかかるが、今年度は、学校週五日制になって休業日の入館者は、果たして増えるだろうか？

来館者のアンケートで素晴らしい評価が目につくのは、本当にうれしい。もっと「宣伝を」の意見には、その方法を考えていきたい。

全国的に、資料館・郷土館といった施設には、残念ながら学芸員や研究員が得られなく、また、予算も少ないのが現状であるという。

それは、新しい教育のために、大切な施設であり、社会教育の観点から一層の助成・援助がなされるべきものである。

小さいからといって、体系を整えられず、充実できない資料館では、いけない。

今後、より発展するための方策を模索しなければならぬと思う。

# 「やまがた古代の役所」

## 第四回企画展開催

「やまがた古代の役所」の企画展は、十月一日から十一月三十日まで開かれていた。戦後本格的な調査が行われた陸奥国府多賀城、平安期の出羽国府城輪柵などから発掘された資料、また置賜郡家の推定地として最近浮かびあがってきた大浦や道伝などの資料から、その変遷をたどってみた。

### 国府のすがた

古代の東北は、太平洋側に陸奥国、日本海側に出羽国の二国があった。二国とも広大で、資源に富んだ豊かな未開拓の地であった。ここに当時の律令政権が注目したのは当然であった。

陸奥国は七世紀後半にまず成立し、出羽国は七十二年（和銅五年）に置かれた。陸奥国府は多賀城であり、七二〇年前後に政庁が置かれている。出羽国府は、一時秋田にあったこともあ

るが、九世紀初頭に酒田市城輪柵遺跡に移されたとする説が有力である。陸奥国府は七世紀後半にまず成立し、出羽国府は七十二年（和銅五年）に置かれた。陸奥国府は多賀城であり、七二〇年前後に政庁が置かれている。出羽国府は、一時秋田にあったこともあ

### 郡家の移りかわり

は、一時秋田にあったこともあ

るが、九世紀初頭に酒田市城輪柵遺跡に移されたとする説が有力である。

力である。

とができる。

多賀城の創建期と第三期（九世紀）の瓦、陶硯、施釉陶器、土器類などの資料を展示した。城輪柵関係では、外郭の柵木や、円柱、瓦類、墨書土器、周辺

見された遺構図面・写真などのパネル、土器や墨書土器・木製品などの資料も陳列されている。まだ全容解明までは時間がかかると思われるが、置賜郡の郡家が、小郡山↓郡山↓大浦↓道伝の順で移転したという大胆な仮説のもと、周辺出土の遺物を提示し、今後の検討素材とすることをねらった。

### 人びとのくらし

これら国・郡の役所の支配のもとに、租税の労役の重い負担にあえぐ農民たちのくらしはどうであったのか。

来る十一月二十五日～二十六日、当館で結成総会及び研究会が開かれることになった。テーマは「東北の板碑と中世社会」。

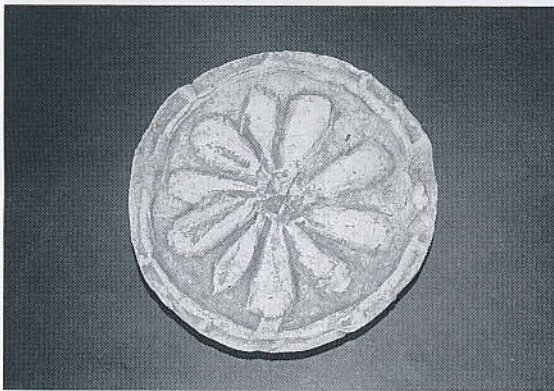
米沢市笹原遺跡にスポットをあて、奈良時代から平安時代初期の村と一棟の堅穴住居から出土した土器類、木製の鋤などを展示した。

講演「板碑からみた中世社会」 国学院大教授 千々和到氏。（二十五日）

まで仮説であるが、その変遷をたどってみた。

すぐに見てわかる展示というより、ていねいにみてじっくり考えることにねらいを置いて、

詳しくは当館までお問い合わせのこと。（二十六日）



城輪柵出土の鳥形陶製品と瓦



展示の状況

### 東北中世考古学会予告

# 「うきたむ考古の会」誕生!!

## 考古で楽しむ

### 魅力ある結集を

「みんなで楽しく考古学を学ぼう」とのよびかけで、昨年からの考古学入門講座の受講者を中心に「うきたむ考古の会」が誕生した。

発会の総会は、去る九月二日入門



発足の総会(9月2日)

講座終了後開かれ、四〇名が参加した。会の規約の審議を行い、今年度事業を決定、役員を選出して正式に発足した。考古資料館での行事には優先的に参加でき、遺跡見学会や体験学習、雑誌「うきたむ考古」の発刊など独自の事業も行う予定である。年会費二千円。現在会員数四〇名。だれでも入会できる。

選出された役員は次の通り。

会 長	川崎 利夫 (考古資料館)	委 員	岩崎 義信(長井)
副会長	井沢 良治(高島)	〃	大沼与右衛門(村山)
〃	高橋 良一(天童)	〃	長瀬えみ子(天童)
監 事	我妻 貞蔵(高島)	事務局長	村山 賢司(山辺)
〃	齊藤 隆一(天童)	〃	宇佐美みふゆ
委 員	渡辺 一(高島)	事務局員	鈴木 栄一
〃	長谷部 優(米沢)	〃	島津美智雄
			(以上考古資料館)

## 来年度の企画展は

### 「山形県の古代窯業遺跡」

来年度は本館開館四年目を迎えるが、前期の企画展は「山形県の古代窯業遺跡」のテーマで行うことを検討している。

県内の窯業遺跡の発掘調査は一九五〇年代後半から始まり、調査例は三〇をこえるが、県内の主要な窯跡とその出土遺物を紹介し、年代や編年にせまるとともに、律令政治体制や生産のしくみについてもとりあげることにする。

できるだけ一般の方々にもわかりやすい展示にするため、写真やジオラマもふんだんに使うことを検討している。県内の窯跡について広く一堂に展示するのは、県内でもはじめての試みとして大きな期待がもたれる。

展示資料は、窯跡から出土した各種の須恵器をはじめ赤焼土器、瓦類、窯道具、その他の造形物を主とし、あわせて供給と

需要の面から官衙なども関連的にとりあげる予定である。それに窯構造・粘土精製・成形・ろくろ技術なども含めて展示することになる。

須恵器窯である「あな窯」(登り窯)が中心となるが、その後の展開にも触れ、中・近世窯に関するもの取りあつかうことになる。

後期(一〇月―十一月)には、「置賜地域の最新発掘情報展」を予定しており、目ざましい成果をあげている発掘調査が、地域の歴史をどう変えつつあるかに迫ろうとするものである。

## 入門講座で

### 窯跡の発掘

第二期の考古学入門講座は、「日本のやきものの移り変わり」をテーマに、去る八月一二日をかわきりに月二回ずつ開かれていく。受講者は今年も四〇名をこえた。

中盤を迎えた来一〇月二二日は、考古学体験学習として発掘調査の実習が行われる。場所は、考古資料館北側の山すそにある味噌根一号窯跡である。昨年発見され、近くの古墳群などから出土する須恵器を供給した窯跡とみられ、もし七世紀代にさかのぼるとすれば、県内最古の窯跡となる。その成果がおおいに期待されるが、雪が降るまでの間に、高島町教育委員会の協力をえて、続行される予定である。

なお、入門講座はこれから古墳時代、古代、中世とつづき、一月二七日(日)近世陶磁器講義をさいごに当日閉講式が行われ、第二期が終了する予定である。来年度の第三期も予定しており、遺跡発掘を中心とした講座になる予想で目下検討中。

## 郡家推定地を歩く

## —小郡山・郡山・大浦・道伝—

置賜地域がはじめて史上にあ  
らわれるのは、六八九年に「優  
嗜曇郡」の現地民二人が出家す  
ることを願いで許される記事  
である。(日本書記)従って六四

五年の大化改新以後、当時陸奥  
国に属していたこの地が、「うき  
たむ郡」として郡が置かれ、国  
の支配体制に入ったことがわか  
る。

和銅六年(七一二年)出羽国  
が設けられると、いまの山形市  
周辺の最上郡とともに出羽国に  
編入される。郡には国の管理の  
もとに、その役所である郡家(郡  
衙)が置かれ、租税のとりたて  
をはじめ一般の行政にあたった  
郡の長官を郡司といい、地方の  
有力豪族が任命された。

郡家は、郡庁をはじめ役人が  
泊る館、租税を収納する正倉、  
まかないや食堂を兼ねる厨屋な  
どの建物が並び、かなり広い  
場をしめた。郡家があったとこ  
ろには「郡」や「郡山」などの  
地名が残る場合もある。置賜郡  
家は、まだそのような明らかな  
になるような調査例はなく、推  
定の域をでないが、かなり確実  
な例も最近の発掘調査で出てい  
る。

高島町小郡山は、まだ調査が  
行われていないが、もともとは  
古郡山でもっとも古い郡家があ  
った地と思われる。一部に屈曲  
した濠跡が残り、周辺より古代  
の土器が出土する。多分これは  
陸奥国に所属していた頃の郡家  
で、八世紀になり出羽国の成立  
により、南陽市赤湯駅西側の郡  
山に移転したらしい。この近く  
の沢田遺跡からは、奈良時代の  
堅穴住居跡や土器などの遺物が  
出土しているが、郡家らしい痕

跡は未確認である。

一九八七年米沢  
市街の北にある中  
田町大浦B遺跡か  
ら、奈良時代から  
平安時代にかけて  
の沢山の遺物を伴  
って、四〇メート  
ル四方に塀か柵を  
めぐらした中から  
五棟の倉庫跡が掘  
りだされた。その  
中から硯や延暦二  
三年(八〇四年)  
の暦の漆紙文書が

見つかり、郡家の一部であると  
考えられている。

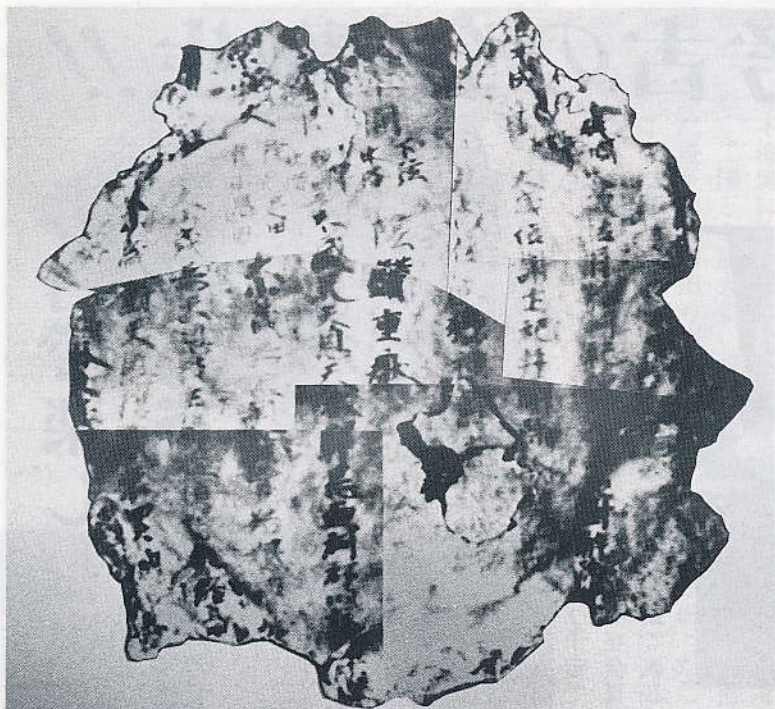
ほ場整備によって一九七九年  
から調査が行われた川西町下小  
松道伝遺跡からは、大型の建物  
跡をふくむ一二棟の掘立柱建物  
跡が掘り出され、多数の木製品  
や墨書土器が発見された。中に  
寛平八年(八九五年)の年号が  
書かれた租税収納を示す木簡が  
あった。これは国司などに報告  
する文書であり、これも有力な  
郡家の候補地である。

今後他に有力な郡家が発掘さ  
れれば別であるが、今のところ  
小郡山(七世紀後半)→郡山(八  
世紀前半)→大浦(八世紀後半  
→九世紀)→道伝(九世紀後半  
以降)と郡家に移転したと考え



高島町小郡山附近

られる。ただこれらの地につい  
ては、郡家の下部施設、各郷に  
分けて移した郡の倉であるとの  
推測もあり、必ずしもまだ明確  
ではない。これらの地には、前  
代の古墳が多く分布することも  
興味深い。有力な豪族が近くに  
いたことを示すが、今後の詳し  
い研究にゆだねられている。



大浦B遺跡出土の漆紙文書(具注暦)

